

岩手大教育 ○長沢由喜子 他10名(第1報と同じ)

目的：第1報に同じ。本報では第2報の高齢者・夏季における調査報告に続き、冬季における高齢者の寒さへの対応に関する検討を行う。検討項目は第2報に準ずるものであり夏季・冬季各々の調査結果に基づく夏冬の比較検討についてもあわせて報告する。

方法：第2報に同じ。

結果：夏季に比較し、着衣・寝具の状況、住宅および住まい方対応における地域差が顕著である。着衣では東北・北陸において男女ともに下着の重ね着枚数が多くなる傾向が認められ、寝具でも同様に敷布団の重ねおよび電気毛布の使用率の高さが際立つ。しかし北海道の場合には着衣・寝具ともに関東以西と変わらないことにより暖房条件の整備が着衣・寝具の状況に大きく影響する事実が認められた。住宅・住まい方対応では「断熱材使用」が北海道6割、東北3割と他地域に比べ圧倒的に多く、夏季における防暑手段としてよりむしろ防寒手段としての位置付けが優先することが確認された。二重窓についても寒冷地での普及率の高さが顕著であるが市街地周辺部への普及にとどまっている実態があきらかである。温度調節方法についても同様に地域差が顕著であり、北海道におけるこたつ利用の低さおよび睡眠時のストーブ利用率の高さが前述の結果を裏付けている。東北・北陸はこたつ+ストーブ併用暖房、関東以西はこたつまたはストーブの単独暖房である点が特徴的である。寒さに対する抵抗力との関連では「寒さに弱い」場合に防寒対策に対する積極的姿勢が認められるものの、夏季同様寒さを当然のこととして受け止める傾向は変わらない。今後、快適暖房と重ね着習慣の不応など高齢者独自の検討課題となろう。